闇の中の炎

「ああ、だめだ。」

理沙は、描きかけのスケッチブックをビリビリと破った。

明日がコンクールに出す作品の下絵を提出する締切なのに、全然描けない。それどころか題材もアイディアも浮かばない。理沙は大きくため息をついた。

去年の作品は自分でも手応えがあった。先生もすごく褒めてくれて、来年は入賞を目指せるよって励ましてくれた。期待してくれてるのに。今年は出品すらできないかもしれない。

不安と焦る気持ちを打ち消すように、理沙は本棚から一冊の本を取り出した。先週行った絵画展で父に買ってもらった画集だ。パラパラとめくっていく理沙の手は、あるページで止まった。理沙の目はそのページに釘付けとなった。暗い夜の闇の中に、赤い炎が燃えている。その炎の周りを囲んで座る人々の姿が描かれた版画だった。

たちまち理沙の中に、一つのイメージが浮かんだ。火と、それに引きつけられる人々。理沙はスケッチブックを取り出すと、一心不乱に描いていった。描ける。これならきっと。

翌日、理沙は美術部の先生に下絵を見せた。

「これは素晴らしいね。さすが庄司さんだ。」

「ありがとうございます。頑張ります。」

「この絵は何を描いたものなの。テーマは何？」

問われて、一瞬、理沙は言葉に詰まった。

「あの、えーと、去年の夏、キャンプファイヤーに行って、その時の思い出を……。」
「なるほど、そうか。これは仕上がりが楽しみだ。タイトルは？」
「キャンプファイヤーの夜、です。」
思わず口にしてしまったが、意外にいいタイトルかもしれない。理沙は嬉しくなった。頑張って作品を仕上げよう。絵の具を混ぜる理沙の心ははずんだ。

「理沙、何やってるの。」
有紀の声に教室から窓の外を見ていた理沙はびくっとした。校庭ではサッカー部が練習を始めている。有紀はいつまでも美術室に来ない理沙を呼びに来たのだ。
作品は順調に仕上がってきている。同じ美術部の有紀も「いいね。」と楽しみにしてくれている。だから来るのが遅い理沙が気になったのだろう。締切は迫っている。
だが数日前から、筆を持つ理沙の手は止まりがちになっていた。色を作る時、キャンパスに絵筆をのせる時、理沙の心に何度となく、ある声が聞こえてくるのだ。
これでいいのかしら。なんだか人の絵を真似してるみたい。
ううん、と理沙は思わず首を横に振った。別に全部真似したわけじゃない。画集を見ていて自分のアイディアが浮かんだだけ。あの作品は版画だったし、私のは油絵。タッチも構図も違う。全然印象が違う。自分の絵には別のテーマもある。
手が止まるたびに、理沙は繰り返しそう言い聞かせた。これでいいんだ。
今日は一番大事な炎のところに色を加えていくはずだった。でも、何か気が進まない。それで美術室へ行くのをなんとなくためらっていたのだ。

「有紀、私、今日はお休みする。」
「ええ、どうしたの。大事な時なのに。何か用事なの。」
驚く有紀から顔を背(そむ)けるように、理沙は鞄(かばん)を持って教室を駆け出していった。

「あら、もう帰ってたの。どうしたの。」
作品の仕上げで連日帰りが遅い理沙が先に帰宅しているので、母は驚いた声を上げた。理沙は、
「ちょっと。」
とあいまいな返事をして口ごもった。
「ずっと集中してたから疲れが出たのかもね。そういう時は少し休んだ方がいいわ。今日はお父さんも早いのよ。お母さんも理沙に負けずに美味しいもの作るから、期待してて。」
母の明るい声に理沙は少し笑顔になった。
家族揃った食事で、父は上機嫌だった。会話がはずんだところで理沙が口を開いた。
「ねえ、お父さん。有名な画家の作品を真似して描くのって悪いことじゃないよね。」
「なんだい、突然に。そうだね。いいなと思う作品を模写してタッチや色遣いを真似してみるのはいい練習になるよ。自分らしいスタイルを作っていくためにも必要なことだね。」
「うん。それは分かってるけど……。」
いつもと違って歯切れの悪い理沙の様子に、父も何か違うものを感じたようだ。
「友達が……、あの、美術部の友達がコンクール作品を作ってるんだけど。別の作品からヒントをもらったって、そう言ってたから。私は、ただヒントをもらっただけなんだから、いいんじゃない、って答えたんだけど。だけど、ちょっと気になったから……。」

「ああ、理沙も描いてるコンクールの出品作か。他の人の作品を見てアイディアが浮かぶことは誰でもあるだろうね。そのぐらい気にすることないんじゃないか。」
父の言葉に理沙はちょっとほっとした。その様子を見て父は言葉を続けた。
「だけど、その友達は、気にしてるんだね。なんで気になるんだろうね。」
「うーん。分からないけど。」
「お父さんや理沙が、構わない、って言ったら、気にならなくなるのかな。」
理沙は黙ったまま、自分を見つめる父から目をそらした。
「その友達は、なんだか自分への言い訳を探してるように見えるな。そんな気持ちでいい作品ができるんだろうか。作品はずっと残るんだよ。」
顔を上げた理沙と目が合うと、父は優しい声で続けた。
「その友達の気持ちをもっと聞いてあげたらどうかな。本当は、その子はもう分かってるんじゃないか。自分がダメだと思ったらダメだって。」
部屋に戻った理沙の胸に父の最後の言葉が響いた。
ずっと見ないでいたあの版画を理沙はもう一度開いて見た。暗闇に浮かびあがる赤い炎。その炎の筋が周りの人々をかすかに照らし出している。
画家はこの炎を見たんだ。闇の中で人々を照らす炎を。でも自分にはそれが見えない。この炎を見ていないから。暗闇の中で輝くこの炎を私は描くことはできない。
自分がダメと思ったらダメなんだ。
理沙はそっと画集を閉じて本棚に戻した。あの作品を完成することはできない。新しい作品を描き始めてももう締切には間に合わないだろう。でも……。
理沙はスケッチブックを取り出すと、夢中で鉛筆を走らせていった。

〈文部科学省　中学校道徳読み物資料集〉